

「希望が見えない時にこそ」

ローマの信徒への手紙 13章12節

本学講師・日本キリスト教団吉祥寺教会牧師 吉岡 光人

闇は深まり 夜明けは近い あけの明星 輝くを見よ
夜ごとに嘆き、悲しむ者に よろこびを告ぐる 朝は近し

『讃美歌 21』243 番(闇は深まり)第 1 節 詞 ヨッヘン・クレツパー

1930 年代、ドイツ人のヨッヘン・クレツパー Jochen Klepper という詩人が、ローマの信徒への手紙 13 章 12 節にインスピレーションを受けて、「クリスマスの歌」Weihnachtslied と言う題の美しい詩を書きました。それに曲を付けて賛美歌となったのが『讃美歌 21』の 243 番(闇は深まり)です。クリスマスは古代から「光の降誕祭」とも呼ばれてきました。イエス・キリストを「光」に喩えて、最も日照時間の短い冬至に合わせて祝われて来た祭りです。ヨハネによる福音書には「光は暗闇の中に輝いている」とあります。「イエス・キリストという光が暗闇の中にやって来た」とキリスト教会は信じてきました。それゆえに、クリスマスという祭りは単に「明るく、楽しい」祭りではなく、人間世界の「闇」の中に来られた「真の光」であるキリストが来たことを祝い感謝する祭りなのです。

詩人ヨッヘン・クレツパーは、1938 年にこの「クリスマスの歌」を含む 29 の詩を収めた詩集『キリエ』Kyrie を出版しました。クレツパーにとってはこの詩集を出版することは容易なことではありませんでした。彼がこの詩集を出版した頃、ドイツはアドルフ・ヒトラー率いるナチス党が政権を握っており、言論の自由が厳しく制限されていましたし、ユダヤ人は激しく弾圧されていました。ドイツの民衆の多くはヒトラーを熱狂的に支持していましたが、良心的なドイツ人にとってはとても息苦しい時代でした。クレツパーには更に苦しい事情がありました。それは彼の家族の問題でした。クレツパーはヨハンナという名の、夫に先立たれたユダヤ人の女性と結婚していました。彼女には前夫との間に二人の娘がいました。クレツパーはユダヤ人の妻と娘たちを深く愛し、家族 4 人で幸せな生活を送ってました。しかし、ユダヤ人への弾圧がひどくなってくると、クレツパー家にも暗い影が差してきました。彼の家族は周囲から冷たい仕打ちを受けるようになりました。クレツパーも「ユダヤ人の妻とは離婚しなさい」と勧められました。しかし彼はそれを拒みました。やがて彼は作家協会から除名されてしまい、作家として生活することが難しくなってきました。そんな苦しい状況の中でもクレツパーは家族を愛し、圧力に屈せず作家活動を続けました。そういう生活の中で彼は『キリエ』を出版したのです。この世の闇がどれほど深く、闇の力がどれほど彼と彼の家族を襲ってきても、クレツパーはそれに屈しませんでした。「イエス・キリストという光が、闇の支配の中でも自分たちを照らしてくれている」と信じていたからです。聖書が告げる「希望」というのは、深い闇に囲まれている中にも、イエス・キリストという「真の光」が足元を照らしてくれていることを信頼して、恐れずに歩みを進めることなのです。

2021 年 10 月 26 日 聖学院大学 全学シリーズ礼拝「聖書が語る希望」